

陶町歴史ロマン 21



16、窯業の発展

(1)起業～明治初期

文久元年（1861年）曾根庄兵衛が起業した陶の窯業は、その後、庄兵衛の誘いもあって水上村の永井徳右衛門が開業し、続いて猿爪村の中村九郎衛門ほか数名も開業してある程度さまになってきました。更に水上村の小木曾増右衛門が原料処理を従来の石臼での手つきやら唐臼による方法から水車による千本杵つきの方法で開業した。



水車による千本杵つきの方法は、これより12～3年前に稲津村の庄屋、和田亀右衛門が石粉の粉碎に使用したのが日本で最初であり、創始者とされています。稲津村も頑張っていたのです。

明治5年になると、それまで庄兵衛達を苦しめた窯株制度が廃止になり更に開窯するものが増えてきました。

明治5年には伊藤五郎右衛門（明智騒動で国元追放された永井九郎衛門の弟で、伊藤初兵衛の養子）により山五陶業も開業しています。「山五」という屋号は「山の中で五郎右衛門が開窯した。」ところから付いたといえます。

(2)永井九郎右衛門の帰村

明治5年、慶応の明智騒動（歴史ロマン12 陶町産業の夜明け 参照）で村人煽動の罪で国元追放になり三重県の安濃津村で帰農していた庄兵衛の盟友、永井九郎右衛門が罪をゆるされ7年ぶりに帰村しました。この帰村を村の人たちも小躍りして喜びました。なにしろ村が不作で苦しんでいる時、村人の為にお上と戦った英雄の帰村だったのですから。

九郎右衛門は自分が追放された後、永井家の面倒を見てくれた庄兵衛に感謝するとともに、自分の一族をはじめ、この地が製陶業の盛んなことに呼応して陶磁器仲買商を始め陶窯業の発展に努めました。

(3)西南戦争後の活況と不況

明治10年（1877年）の西南戦争が始まると、政府は戦費調達のために紙幣を乱発したため、戦後は超インフレになり物価が高騰しました。この地方の窯はその恩恵（物価高騰）

を受けて高値で茶碗をさばくことができ好況を呈しました。

この活況に乗じて生産を拡充し輸出磁器生産の準備として、生產品目を従来の茶碗・小皿の類から湯呑・土瓶・井などにも拡げ、手法も従来の染付一本から各種の方法を採用し、酸化コバルトの使用と相まって、白寿紋皿等を製造できるようになり、これまでの粗製品より精製品へと転換していった。

明治 12 年には岐阜県知事のすすめで濃穰商社（美濃の地で豊かに実るの意味か？）が設立され、社長に曾根庄兵衛が就任し、燃料・原材料も共同購入、製品の販売斡旋、技術の共同研究を目指しました。しかし、不況下で業者をまとめきれず、裏切り業者も出てわずか 2 年後の明治 14 年には解散してしまいました。

西南の役直後の好況もさほど長くなく、インフレ不況が深刻となり、その対策のためのデフレ不況と続き、明治 14 年には茶碗価格は暴落し、この地の起業家たちも廃業に追い込まれた人が多数いました。

(4)輸出用陶磁器の生産開始

明治 7 年 中村弥九郎が遠州三ヶ日村から猿爪村に来て陶工となり、展覧会で見たフランス焼きの純白さに感動した弥九郎は同 9 年に水上村の工場で磁器製法を研究し、9 年後の同 17 年になって白磁の製造に成功、扇を 2 枚重ねた形のバター皿を白磁で製作した。これに自信を得た弥九郎は猿爪村に戻って太白素地（たいはくきじ）による輸出磁器の製造を始め、以後陶地区の窯業発展に多大な貢献をした。

太白とは太白星（金星…宵の明星・明けの明星）のことで、即ち太白素地とは白さを追求した素地のことである。昭和 40 年頃まで唄われた陶中応援歌の NO. 1 は「白磁の陶の名をもちて～」で始まります。「白磁」は、陶の代名詞なのです。

中村弥九郎の多大な貢献を讃えて、桜ヶ丘公園に「中村弥九郎寿碑」と刻まれた板碑があります。

この板碑の題字は岐阜県知事 山田万平、碑文は永井園次郎によるもので、大正 12 年 盛大に除幕式が行われたとのことです。

桜ヶ丘公園には陶祖碑（大川窯、水上向窯、猿爪窯、水上田尻窯の 4 人の陶祖を刻銘）の右に中村弥九郎寿碑、陶祖碑の左に曾根庄兵衛の紀功碑が建立されていて、毎年 8 月 13 日の陶町陶祖祭では、その前で祭りの神事が執り行われます。

陶地区の窯業は曾根庄兵衛、中村弥九郎ら先駆者の後を受けて猿爪村に水上村にと次々と開窯する者が増え、窯業地帯としての基盤を築いてい



中村弥九郎寿碑(桜ヶ丘公園)

きました。

山五陶業も明治17年以降中村弥九郎の影響を受けて洋食器を生産するようになりました。明治18年には伊藤重次郎が金中製陶所を起業し、後に陶の御三家と呼ばれる曾根、山五、金中が揃いました。また、明治30年には、後に陶村長・陶町長になる中村僊輔が山中製陶所を起業しています。この山中製陶所は、後に金中製陶所と合併しました。

明治20年頃になると、それまで生素地のまま釉薬をかけて本焼きしていたものが、素焼きのうえに釉薬をかけて本焼きにするとか、媒融剤が栗皮灰から石灰に変わるとか、摺り絵の型紙も銅板を使用するなど生産技術は目覚ましく向上し、「安かろう悪かろう」から一定の評価を得るようになりました。

明治25年には金中が貿易を目指して名古屋に「金中商店」を設立、明治30年頃には山五陶業が同じく名古屋に「山五商店」を設立と、輸出を目指す窯業の下地ができていきました。

明治28年に日清戦争が終わると、膨大な戦費からみて、また西南の役の後のように不況風が吹くかと思いきや、清国から莫大な賠償金を得たこともあり、日本の景気は好況に推移した。そして、陶の陶磁器業は支那（台湾を含む中国）・米国で白磁の陶磁器が好評で、利益率もいいことから国内向け生産から輸出向け生産が主流になっていった。主流というより輸出向けに転業していった。

(5)陶祖 曾根庄兵衛

陶の窯業の発展を語る時、曾根庄兵衛の存在は計り知れないものがあります。

庄兵衛の誕生から永井九郎衛門の帰村（明治5年）までは「陶町産業の夜明け」の項で述べたので、それ以降の庄兵衛の足跡をいくつか追ってみたいと思います。

明治13年には県知事より戸長の示達を受け、再び戸長の任に就いている。この時の戸長業務の際に事務一切を仕切り、庄兵衛を助けたのが盟友永井九郎右衛門の息子で後の陶村長 永井園次郎である。

明治12年に設立した濃穰商社は2年ほどで解散となってしまうまいかなかったが、設立の趣旨は「猿爪地区の発展には窯業の発展が不可欠であり、そのためには自分さえ良ければ…の考えを捨て、情報を公開し合い、地区全体が等しく発展していかなければならない。」というものであり、この信念はいささかもゆらぐことはなかった。

明治17年頃になると、瑞浪に通じる岩村新道の工事が始まり、駄馬・駄牛による物資の輸送が、より大量に運べる馬車・荷車による輸送に変化してゆきます。

しかし、陶が名古屋に出る際に使う中馬街道は昔のままの細い山道で、馬車運搬はできません。そこで明智の橋本幸八郎を主唱者にして、街道有志で『街道講』を起こした。講の益金で街道の改修をしようとしたもので、曾根庄兵衛も賛同者に名を連ねている。それにしても講の益金（利息）で街道を改修できるほど集まるのでしょうか？ とにかく、その甲斐あって明治23年には中馬街道の瀬戸～明知間の改修工事が始まりました。

明治 19 年 還暦を迎えた庄兵衛は、翌 20 年に自分が起業した創業 26 年の山庄製陶所を息子の曾根猪之助に譲り（社名は後に山イ製陶所に改名）隠居生活に入ります。

この頃には恵那郡内で 100 社近くの業者が陶磁器業（製造・販売）を営み、太白素地の製造は精良品として高く評価され、猿爪窯の地位は揺るぎないものになりつつありました。



曾根庄兵衛紀功碑(桜ヶ丘公園)

九郎右衛門・増右衛門らは「曾根庄兵衛は、恵那郡下の陶祖たる人だ。紀功碑を建ててその功績に報いよう。」と発案しました。

庄兵衛は当初断りましたが、やがてやむなく承諾すると九郎右衛門らは小崎岐阜県知事宛に建設申請をしました。

すると、知事は許可と同時に庄兵衛に『磁叟』の号を贈り永年の辛苦をねぎらいました。磁叟とは、陶磁器業界に偉大なる貢献のあった大人物を意味する称号である。

明治 29 年には恵那郡下の陶祖として紀功碑が猿爪の関屋に建設され、伊藤五郎右衛門（山五陶業創始者）

を発起人として、時の衆議院議員ほかを迎え盛大に除幕式が執り行われました。（紀功碑は明治 44 年に桜ヶ丘公園が開園されると桜ヶ丘公園に移され現在に至っています。）

話しは少しそれるが、明治 33 年には、若き医師「水野 馨」が庄兵衛の誘いに応じて猿爪村の曾根宅隣に「水野医院」を開院し、無医村問題の一応の解決をみている。



今も残る「水野医院」の入院棟

明治 34 年 庄兵衛 76 歳の時には、40 年以上の長きにわたって産業振興に貢献したということで、産業人にとって最高の栄誉である緑綬褒章を岐阜県知事より頂いている。

明治 37 年 庄兵衛は 80 歳の天寿を全うした。当時としては大変な長生きで、まさしく

大往生だったようである。その葬儀は猿爪始まって以来の盛大なものだったという。